

緩和ケアを立ち上げようとする看護師にエール

私の元職場に、学生時代にボランティアとして出入りしていたという看護師と保健師の資格を両方もつある女性と、何十年ぶりかでお会いしました。

関西、関東方面で緩和ケアに携わり、この度帰郷したようです。勤務で係わったガン患者のことから、在宅や職場で生活しているガンを宣告された方や術後の方、その家族の心のケアにつき添うために、サロンの雰囲気のある「(仮称)在宅緩和ケア支援センター」を立ち上げ、いずれはNPO活動にしたいとか。医師からガンを宣告され、また術後に通院で治療を受けている方も多いようですが、本人は、家族、同僚、友人とも本音で語り合えないということもあるだろうし、心の動揺、不安、孤独感は、日常生活の中では、我々の想像以上のものがあるでしょうね。また、家族も本人にどう語りかけ、寄り添えばいいのかの戸惑いもあるでしょうね。

確かに云われてみれば、ガン患者は身障手帳の対象でもなく、職場や地域で過ごしていても、福祉的、心理的支援等は皆無に近いとか(病状が進行すれば、入院、または重症ガン患者用のホスピスということになりますが、ホスピスとて、数は僅かなよう)。心のケアといっても、ご自身の経験から、医療知識のある看護師が、つき添うことが望ましいという思いからのようです。

社会で生活するガン患者や家族のサロン(カウンセリングの場)としてはそう広いスペースもいらず、街中なら大きい病院へ通院の帰途立ち寄り易いのではないかと、何人かお仲間もいるようですが、まずは場所を探しているようです。こうした面で、支援できそうな方がいましたら、応援して上げてください。

私達の気づかない問題で、いろんな所で、いろんなことに取り組んでいる方々がいるものですね。

(2003年03月21日記)